

笑いの相互行為性

—多人数会話における不均衡状態から笑いの共有に至るプロセス—

児島 麦穂（大阪大学大学院）

1. はじめに

本稿は、女性友人同士の多人数会話を扱い、相互行為において笑いがどのような機能を持ち、それがどのように相互行為のプロセスに現れるのかを解明することを目的とする。特に相互行為上に発生する意見の不一致やポジショニングの不均衡な状態の発生と解消のプロセスに注目し、共通基盤（Clark, 1996）とポジショニング理論（Bamberg, 2004）の視点から談話分析を行うことで、偶発的かつ相互的な笑いがどのように不均衡状態の解消につながるのかを解明する。

2. 研究の理論的枠組み

本研究は、相互行為のナラティブ分析の流れをくむ Bamberg（1997, 2004）らを参考にしている。Bamberg（2004）が提唱した、ポジショニング理論は、会話参与者たちが相互行為としてのナラティブを行う際に、立ち現れる立ち位置を分析する理論である。この理論により参与者たちの表出するアイデンティティの解明が可能となる。

また、ジェスチャー等の非言語情報を分析するために、McNeill（1992, 2005）、Kendon（2004）のマルチモーダル分析を参考にしている。マルチモーダル分析は、視線やジェスチャーがコミュニケーション上で意味を持ち、発話と関係しているとする分析方法である。笑いやそれに伴う身体行動が、会話においてどのような意味を生成するのか、マルチモーダル分析により明らかにし、笑いと共に伴う発言や身体行動により参与者たちが相互行為上で何を実行するのかを分析する。

本研究が依拠するもう一つの理論的枠組みとして、共通基盤（common ground）がある。Clark（1996）によると、共通基盤とは人が相互的にコミュニケーションを行う際に、相手と自分の背景知識を基盤としてお互いに理解しあうことである。この共通基盤には「コミュニティ型共通基盤（communicative common ground）」と「個人型共通基盤（personal common ground）」がある。コミュニティ型共通基盤は、同じコミュニティに所属するために共有している知識が含まれ、個人型共通基盤には共通の経験により得た共有の知識が含まれる（Clark, 1996, 92-121）。さらに、会話参与者たちの共同行為（joint action）により、共通基盤が確立されることを共通基盤化（grounding）と言う。

本研究では、これらの視点からの談話分析により、会話参与者たちが、なぜその場面で、その立場から、それを笑いの対象にしたのか、その笑いはどのような意見が基盤となっているのかを分析する。また、その笑いに他の参与者たちがどのように反応し、参与者間で何が行われているのかを分析することで、笑いを通して参与者たちは何を志向しているのか、何を成し遂げているのかを明らかにし、笑いが相互行為上の不均衡や問題の対処にどのように働いているのかを解明する。

3. 調査概要と方法

本研究では、自然談話を録画録音し、それをデータとしている。2018年、3月、8月、9月に合計9グループ、27名収録した。データの協力者は全員20代前半の女性であり、高校や大学時代の同級生3名を1グループとして、会話を行なっている。本調査の目的は友人同士の私的な相互行為における偶発的な笑いの収録であったため、研究者が不在の環境で、トピックの指定は行わず、20分程度、自由に語ってもらった。

4. データと分析

以下では、会話において何らかの不一致や不均衡が発生し、それが笑いの共有により解消されるプロセスを

分析する。

4.1 感覚の違いによる不均衡の発生と笑いの協働構築による不均衡の解消

本節で扱うデータでは、参与者間で、ある事態を「どのように理解するか」を共有する共通基盤化の確立が当初成されておらず、同意に至らない(データ 1)。この不同意は、参与者たちがある方策をとることによって、解消され、最終的に笑いが協働構築される(データ 2)。

データ 1, 2 の会話参与者 3 名は高校時代の同級生であり、現在はそれぞれ別の会社に勤務している。この場面で彼女たちは、会社の懇親会での男性の振る舞いについて話題にしている。職場の男性に「肩を組まれたらアウト」と拒否反応を示す KF に対して、それが「余裕である」と、職場の男性に肩を組まれることが許容範囲であるという YI と RA の間で、男性との距離感に関して意見の不一致が発生する。

[データ 1]

54. KF: もう K 肩組まれたらアウトやわ(.)
55. いややねんけど、ほんま
56. (. 5)
57. RA: ¥どゆこと¥hh=
58. YI: =¥どゆこと¥huhuhu
59. RA: ¥どゆこと¥
60. KF: え hehe[え heha
61. RA: [¥()¥]
62. [((右手で肩辺りを払う仕草))]
63. KF: なんかも: don't touch me みたいななる、
64. やっぱりも: 拒否反応やばい。

65. RA: [₁ あ: 2 人(きりでとか)?
66. YI: [₁ みんな一緒に(.)会社で飲んでてさ:
67. 会社の(.)なんか [₂ 飲み会とかでも
68. RA: [₂ 余裕であるある。
69. YI: [₃ (. 7) 結構肩(. 3) 組まれるけどな:
70. KF: [₃ ないない。ほんま:?
71. RA: [₄ あるあるある
72. YI: [₄ うん
73. KF: 全然ある:?
74. YI: めっちゃベタベタしてると思う。
75. ¥うちの会社の [人¥
76. KF: [まじで:?

本データでは、54 行目で KF が、職場の男性に「肩を組まれたらアウト」という意見を表明したのに対し、56 行目で 0.5 秒の沈黙後に、RA と YI は 57-59 行目で「どゆこと?」と笑い混じりに質問し、KF の意見が理解できないことを示したのをきっかけに意見の不一致が発生する。

その後 KF は、職場の男性に肩を組まれることに「拒否反応がやばい」(64 行目)という意見を表明するのに対し、YI は「飲み会とかでも(. 7) 結構肩(. 3) 組まれるけどな:」(67, 69 行目)と発言し、RA は「余裕であるある」(68 行目)と KF の意見への不同意を示す。これらの YI と RA の発言は、YI と RA の職場では男性から肩を組まれることはありうる出来事であるということを示しており、職場の男性に肩を組まれることが嫌だという KF の意見への直接的な反対を避ける発言だと言える。つまり YI と RA はここで、「職場の男性に肩を組まれることが嫌かどうか」ではなく、「彼女たちの日常生活で職場の男性に肩を組まれることがあるかどうか」という考え方を導入したと言える。ここまでの、KF と YI, RA では普段置かれている生活環境が違うことが明らかになり、この違いにより職場の男性から肩を組まれることへの感覚が一致しないことを明示化させる。

[データ 2]

95. KF: めっちゃなんか(. 3) 理系やからほんまな
96. なんか[(. 7) ほんまに違うで。
97. RA: [くっつかへん。
98. (1. 3)
99. RA: やっぱそうか:
100. KF: なんかも、そんな人に触られたりしたら
101. なんかも:
102. YI: [₁ hhhh
103. RA: [₁ hh¥確かになんか¥
104. [₂ ((笑いながら YI の肩を慎重に触る))]
105. YI: [₂ ¥確かにこんな¥]
106. [₃ ((笑いながら RA の肩を慎重に触る))]
107. RA: [₃ こんな¥感じなんか¥

108. RA: ¥そそそ、[わ::って、そそそ、なんか]
109. [((YI の肩を大きく触る))]
110. こ、うまい感じ¥=
111. KF: [=不自然じゃない? 多分]
112. [((笑いながら身を乗り出す))]
113. RA: =そか、それ嫌や=
114. YI: hh それは嫌、それは嫌。
115. KF: ¥慣れてない感じがすごい?
116. [ちょっと¥h、ちょっと。
117. RA: [うんうん。
118. YI: [うんうん。
119. RA: 確かにそれは嫌やな。

データ 1 で明確になった、会話参与者たちの職場の男性から肩を組まれることへの意見の不一致は、95-96 行目の KF による「理系やからほんまなんか(. 7) ほんまに違うで」という発言をきっかけとして、会話参与者たちは同意へのプロセスを開始する。この発言により、彼女たちの意見の違いは彼女たちの感じ方の違いではなく、勤めている会社の気質の違いだという定義が設定され、KF の理系の職場に所属する人から肩を組まれるこ

とには抵抗感があるという意見で参加者たちが同意に至る。

このように同意に至った参加者たちは、102行目以降の笑いの協働構築を行う。RAとYIは、理系男性の架空の行動を笑いの対象にすることで当初一致していなかった3名の不一致を解消し、同じ立場で笑いを共有する。

これらの過程を共通基盤の観点から見ると、環境の相違や意見の不一致の表明から「円満」な会話の終結に至る過程で「KFの職場の人々は理系であり、RA、YIの職場の人々とは気質が違う」、「KFは自身の職場の理系男性に拒否感を抱いている」という知識が、「肩を組まれてもいいかどうか」の意見分裂の理由づけとして共有されていく。さらに、彼女たちが元々持っている理系男性の「肩を組まれたら嫌な人」というコミュニティ型共通基盤に基づいて、架空に造形された「KFの職場の理系男性」の行動が参加者間で笑いの対象とされ、それが笑いの発生とその後のKF、RA、YIの相互行為を促したと分析することができる。

これは、本来の「肩を組まれてもいいかどうか」という意見の不一致については完全には解消していないが、条件付きで「理系の男性に肩を組まれてもいいかどうか」という形に姿を変え、その条件下での3名の共通基盤化を強化する過程での行為と言える。このことから笑いは、参加者間の共通基盤化の確立を補助する機能、そして、確立した共通基盤に基づいて笑いをを行うことで、互いの同意を確認し合う共通基盤化を強化する機能を持つことが明らかになった。

4.2 不均衡なポジショニングの発生と均衡な関係性の再構築

本データに登場する3名のうちMTとYNは、当該の国家資格模擬試験を受けており、YNはこの試験で学年1位の点数を取得しているのに対し、MNはこの模擬試験を欠席している。このように模擬試験の成績に差異のある参加者間で、MTがYNの成績が学年で1番良かったことに言及し、YNを自分と違う者として笑いの対象にしたことにより参加者間で不均衡なポジショニングが表面化する。この状態を解消するために、本データでは、MNが「みんな」を話題にすることにより参加者たちの外に対立軸を作り、参加者たちを同じカテゴリーに位置付け、参加者間の同調を取り戻している。

[データ 3]

- | | |
|-----------------------------|-------------------------------|
| 20. MT: え::そ、ほんまも:YNのさ(.) | 25. YN: hhhhhh |
| 21. い、1問間違いに¥ビビり倒すよな¥[hhhh] | 26. MN: [hahaha[hahaha]] |
| 22. MN: [hhh[hhh] | 27. [(右手で膝を叩く)] |
| 23. YN: [(笑顔)] | 28. MT: [¥1位と喋ってたわMT¥] |
| 24. MT: 1位と¥喋ってたわ¥hhh | 29. YN: ((椅子を引いてMT、MNから身をひく)) |

本データで不均衡なポジショニングが発生するきっかけとなったのは、MTが「YNのさ(.)い、1問間違いに¥ビビり倒すよな¥hhhh」(20-21行目)、「1位と¥喋ってたわ¥hhh」(24行目)と、YNの非常に良い成績を笑いの対象として言及したことである。この発言に、MNは膝を叩きながら大きな笑いで反応する(26-27行目)。これらのMTによる笑いは、成績の良いYNと自分(MT)を別のカテゴリーに位置付け、YNを他者化していると言える。

このMTによる笑いにMNは大きな笑いで積極的に参加しているのに対し、YNはこれまでの積極的な姿勢を一変させ、この笑いが行われている29行目で、キャスター付の椅子を後ろへ引き、身体的にMT、MNと距離を取る。この笑いを含む一連の相互行為において、MTの笑いと言語行動、YNの身体行動により「YNとMT、MNは別のカテゴリーに所属する他者同士である」ことを明確化したため、参加者たちの間で不均衡なポジショニングが発生したと言える。

[データ 4]

- | | |
|------------------------------|----------------------------------|
| 32. MN: みんなあれかな。も:模試とかを見据えて- | 60. MN: [2なんか(.)絶対におかしいよな[hh]] |
| 33. YN: ((首を振る)) | 61. MT: [2ほんまに [hahaha] |
| 34. MN: とか | 62. YN: [2((笑顔でMNとMTを見る))]] |
| (中略) | 63. MN: [何かからくり絶対あるよな.] |
| 56. MT: みんな[やばいよな:]] | 64. この5年間を考えると]] |
| 57. [(YNを振り返る))] | 65. [(両手を外に向けて何度か振り、 |
| 58. YN: [1うん]] | 66. 自分の方へ寄せる))] |
| 59. [1((頷く))] | 67. MT: 絶対ある. |

データ 4 では、データ 3 で発生した不均衡なポジショニングが、「MN のみんなあれかな. も: 模試とかを見て-」(32 行目) 発言をきっかけとして後景化する。この発言は、不均衡が発生する前に参加者たちが同意していた「模擬試験の難易度に対して平均点が予想外に低いため自分たち以外の『みんな』は何を勉強しているのだろうか」という意見に基づく。模擬試験を受験した他の「みんな」に言及することで、「みんな」とこの場の参加者たちの間に対立軸を設置し、この場の参加者たちを同じカテゴリー所属する者同士としたのである。この位置づけに従って MT と YN も発言し、参加者たちは自分たち以外を話題にすることで、参加者間の差異を後景化させ、参加者たちの均衡な関係性を復活させる。

その後、この均衡な関係性に基づいて、「なんか(.) 絶対におかしいよな hh」(MN, 60 行目)、「ほんまに hahaha」(MT, 61 行目) と、この場にいない他の生徒たちの成績を笑いの対象にする。この笑いに YN は笑顔で反応するのみであるが、会話参加者たちの共有する意見に基づく、参加者が同調する笑いが行われたことにより、それぞれの成績に関する話題は終了となる。

この知識や立場の均衡と不均衡変遷のプロセスにおいて、笑いは最初、不均衡を表面化させる一因となった。YN はこの笑いへの積極的参加を行わないことにより、不均衡なポジショニングへの直接的な同意を避けた。また、不均衡なポジショニングが後景化し、参加者の関係性が均衡になった際、参加者たちは一致する意見に基づく笑いをを行うことにより、参加者間の同調を確立する。このように、参加者たちの関係性が均衡な笑いをを行うことにより会話が一段落し、別の話題へと会話が進行することが観察された。

5. 考察

意見の不一致や不均衡なポジショニングなどの問題が発生した際、参加者たちは意見を一致させて笑いの対象に対する共通基盤を確立し、それに基づいた笑いの共有、協働構築を行うことで、同調を確認し合い、均衡を築く様子が観察された。特に本研究では、参加者たちは自分たちの外に対立軸を構築することで、自分たちを同じカテゴリーに入れ、この場に不在の対立軸の向こう側の人々を笑いの対象にしている。それにより、参加者たちは意見を一致させ笑いの共有が可能となる。このような笑いの確認により、参加者たちは同調と均衡を確立する。

このように参加者たちは、笑いにより参加者が持つ意見や視点を共有し、共通基盤を構築していることから、笑いは共通基盤の確立を補助・確認する機能、共通基盤強化を強化する機能を持っていると言える。またそれに付随して、笑いにより笑いの対象に対する参加者の意見や態度が明確化されるため、笑いには笑いの対象を他者化する機能、参加者間での笑いの対象への意見の不一致を明確化させる機能があると言える。

6. まとめ

女性友人同士の会話において、参加者たちは何らかの不均衡や不一致、問題を解決するために、何を笑いの対象にするか、どのような意見に基づいた笑いをを行うかをその場その場の相互行為の応じて柔軟に変化させる、相互行為性を持った笑いを行なっていることが明らかになった。このように、本研究で扱った女性友人同士の多人数会話のデータにおいては、参加者たちは最終的には円滑な人間関係を維持する相互行為を志向していることが明らかになった。

[トランスクリプト記号]

[	オーバーラップ記号	¥ ¥	笑いながらの発話	:	長音
(.)	0.2 秒以下の沈黙	[()]	ジェスチャー	=	続けて聞こえる発話
(0.0)	それ以上の沈黙	↑	音の上昇	,	音節の区切り
-	言い淀み	↓	音の下降	?	質問

[参考文献]

- Bamberg, Michael. (1997). Positioning between structure and performance. In Bamberg, Michael (Ed.) *Oral versions of personal experience: three decades of narrative analysis*, *Journal of Narrative and Life History*, 7, 335-42.
- Bamberg, Michael. (2004). Form and Functions of 'Slut Bashing' in Male Identity Constructions in 15-Year-Olds. *Human Development* 47, 331-353
- Clark, H., Herbert. (1996). *Using language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Goffman, Erving. (1974). *Frame analysis: An essay on the organization of experience*. Cambridge: MA: Harvard University Press.
- Goffman, Erving. (1981). *Forms of talk*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Kendon, Adam. (2004). *Gesture: Visible Action as Utterance*. Cambridge: CUP.
- McNeill, David. (1992). *Hand and mind*. Chicago: University of Chicago Press.
- McNeill, David. (2005). *Gesture and thought*. Chicago: University of Chicago Press.